



チャールズ・ダーウィン著「一人の子どもの伝記的素描」

宇津木, 成介[訳]

(Citation)

近代, 102:15*-33*

(Issue Date)

2009-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002133>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002133>



(翻訳)

チャールズ・ダーウィン著 『一人の子どもの伝記的素描』

宇津木 成介 (訳)

はじめに

以下は、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) が1877年に「マインド」誌の第2巻 (285-294ページ、通巻第7号19～28ページ) に執筆した「一人の子どもの伝記的素描 : A Biographical Sketch of an Infant」の全訳である。ダーウィンによれば、彼は彼の第一子の発育について観察記録をとっていたが、テーヌによる子どもの発達に関する記事をマインド誌上で読んだことがきっかけで、37年前の観察記録を再読し、彼自身の子の心的発達について述べ、テーヌの場合との比較を試みたものであるという。

なお、本文中で子どもの月齢や日齢を示すのに、114 days old, on the 45th day, at the age of 32 days 等の表現が用いられている。これらはそれぞれ生後114日、生後45日目に、生後32日で、のように訳し、またところで「生後」を省いた。なお、114 days old , on the 114th day, at the age of 114 days が同じ日を指しているかどうかは、定かではない。

本文中のイタリック部分は日本語では下線部とした。括弧 () 内に「訳注」「訳補」などの表記がある場合は、翻訳者の言葉である。訳注で番号のあるものは文末にまとめて注とした。短い訳注は本文の括弧内にそのまま記述した。括弧内に英単語が並んでいる場合は、直前の訳語に相当する原文の表記を示したものである。それ以外はダーウィン本人が括弧書きしている場合である。

「一人の子どもの伝記的素描」 A Biographical Sketch of an Infant

マインド誌の前号 (p.252) に翻訳されていた、ひとりの子どもの精神発達に関するテヌ氏 (訳注 1) の興味深い記事を読んだのがきっかけで、私は、自分の子どもの一人についてつけていた 37 年前の日記 (訳注 2) を読み返すことになった。私は、子どもを間近で観察できるという非常によい機会を得て、観察したことはなんでも、即座に書き留めていた。当時の私の主たる研究対象は表出行動 (expression) であり、この問題について書いた私の著作 (訳注 3) にこの記録が役立っている。しかし表出行動以外のいくつかの点に対しても私は注意を向けていたので、私の観察にはおそらく、テヌ氏の観察と比較した場合に、いささか興味深いものが含まれているだろうし、また、今後行われるに違いない観察とも、比較することができるだろう。自分自身の子どもたちに関する観察から、私は、いくつかの能力の発達時期は、子どもによって、それぞれかなり異なるだろうと思っている。

生後 7 日のうちに、わたしの子どもはさまざまな反射行為、つまりくしゃみ、しゃっくり、あくび、伸び、そしてもちろん吸てつと叫喚を行った。7 日目に、私は彼のかかとに直接、紙片を接触させたが、ちょうど年長の子どもがぐすぐぐられたときにするように、かれは脚を反射的に引っ込め、同時につま先を丸める動作をした。これらの反射的運動は完全なものであるから、意図的動作が不完全であるとすればそれは筋肉や (筋肉運動の：訳補) 協調の中樞が不完全だからではなく、意志の座の状態のせいであることがわかる。すでにこの時点で、たしかに非常に早期ではあるが、暖かく柔らかい手で彼の顔に触れると、乳を吸おうとする意欲 (a wish) を刺激することが、明らかに見て取れた。これは反射あるいは本能的行為として考えなければなるまい。なぜなら、母親の乳房に接触するという経験や連合がこれほど早くから作用しているとはとても信

じられないからだ。最初の2週間のうちに、なにか突然に音がすると、この子どもはしばしばびっくりして（start）瞬き（blink）をした。私の他の子どもたちでも、同様の事実が生後2週間のうちに観察されている。生後66日目に、わたしは偶然にくしゃみをしたが、そのとき彼はひどくびっくりして、顔をしかめ、おびえた様子をしてひどく泣き始めた。その後一時間のあいだ、ちょっとした音がするたびに彼はびくとしたが、それは年長者の場合であれば不安げな（nervous）という言葉があてはまるような状態であった。突然目の前にあらわれた物に対して彼が初めてびっくりしたのはこの日の数日前であった。しかしその後かなり長い間、彼は視覚刺激に対するより、音刺激に対してびっくりして瞬き（winking）をした。生後114日に彼の顔のそばで菓子に入ったボール紙の箱を振ったところ、彼はびっくりしたが、同じ箱でも菓子が入っていない場合には、また、他のものを同じくらいの距離、あるいはさらに顔に近づけてみたが何も生じなかった。これらの事実からわれわれは、瞬き（winking）はあきらかに目を保護するために生じるのであるが、これは経験によって獲得されたものではないと推測することができる。彼は一般に音に対して非常に感受性があるが、彼は生後124日目になっても、どこから音がするのか容易にはわからず、音の発生源に目をむけることはできなかった。

視覚については、彼はすでに生後9日目にはろうそくを注視したが、45日目に至るまで、他の物に注視することはなかった。しかし45日目に、彼の注意は派手な色の房飾り（tassel）に向けられた。彼が注視するとともに手の動きが止まったのである。驚くべきことに、速い速度で揺れ動く物体を目で追う力を獲得するのは非常に遅かった。生後7ヶ月半の時点でも、彼はこれを上手に行うことができなかった。生後32日で、彼は3インチか4インチ離れたところから母親の胸を知覚した。これは、彼が唇を突き出し、胸を注視したことによる。しかしこれが視覚と関わっていたかどうかは疑わしい。彼が母親の胸に触れなかったことは確かである。彼は匂い、あるいは温度の感覚に導かれて

いたかもしれない、また、彼が抱かれていた姿勢（position）との連合によるのかもしれないが、私にはわからない。

彼の手足と身体の運動は長い間あいまいで無目的であり、たいていはけいれんのような動き（a jerking manner）であった。しかし規則には例外があって、ごく早い時期から、生後40日より以前であることは確かであるが、彼は自分の手を自分の口にもっていくことができた。生後77日に、かれは哺乳びんを右手でつかんだ（彼の授乳の一部はこれによっていた）。これは、彼が乳母の右手に抱かれていても左手に抱かれていても、同様であった。その一週間後まで、私がそうさせようとつとめたにもかかわらず、彼は自分の左手でつかもうとはしなかった。だから右手は左手より一週間早いということになる。しかしこの子どもはその後、左利きであることがわかった。これは疑いもなく遺伝であって、彼の祖父も、母も、男きょうだいの一人も、左利きであったか、あるいは今でも左利きである。生後80日から90日の間に、彼は何でも口の中に入れ、2～3週間のうちに、これにかなり上達した。しかし、彼はしばしば、まず物体に鼻を接触させ、次いで口のなかにもっていった。彼は私の指をつかんで口にいれようとしたが、彼自身の手がじゃまをしてうまくいかなかった。しかし生後114日目に、この動作を行ったあと、自分の手を離して私の指の端を自分の口の中に入れることができた。この行為は何度か繰り返されたから、明らかに偶然ではなく、合理的な（rational）行為であった。手や腕の意図的な運動は、体躯（body）や脚（legs）の運動にかなり先立っていた。しかし脚の無目的な運動はたいてい、非常に早期から、歩行の場合におけるように左右交互であった。生後4ヶ月で、彼は自分の手や身近なものをじっと見つめることがよくあった。その場合、彼の両目は内側に向き、ひどい斜視の目つきになった（the eyes were turned much inwards, so that he often squinted frightfully）。それから2週間のうちに（つまり132日目に）、彼の手と同じくらいの距離までものを顔に近づけた場合、かれはそれをつかもうと試みたが、うまく

いかないことが多かった。かれはそれより遠いものに対してはそれをつかもうとはしなかった。彼の眼球の輻輳が手がかりとなって、手を伸ばすようにし向けた (excited him) ことに疑いはないだろうと思う。この子どもはこのように早期から手を使い始めたが、特に適性があったというわけではない。なぜなら2歳4ヶ月の時点で、彼は鉛筆やペンやその他のものをつかんだが、彼のつかみかたは、当時まだ生後14ヶ月だった妹にくらべて遙かに稚拙であったからである。妹のほうは手の操作が、生まれつき非常に器用であった。

怒りについて：怒りを感じはじめる時期を決めることは難しかった。生後8日目に彼は、叫喚 (a crying fit) をはじめる前にしかめつらをして、目の周囲の皮膚にしわをよせたが、これは痛みや苦しみ (pain or distress) のせいであって、怒りのせいではなかったかもしれない。生後約2週間のとき彼はかなり冷たいミルクを与えられたことがあり、そのときにはミルクを吸っている間じゅう、ずっと額にしわをよせていた。それで彼はまるで、したくないことを無理矢理させられている大人が渋面をつくって (make cross) いるようだった。ほぼ4ヶ月になった時点で、あるいはたぶんもっと早い時期から、血液が顔面と頭部にどっと流れ込むその様子から判断して、彼が激しい感情状態になりやすかったことは疑いない。それにはほんのちょっとした原因でも十分であった。7ヶ月をすこし過ぎたころ、彼はレモンが転がって手でつかめなかったので、怒りで泣き叫んだ (screamed with rage)。11ヶ月の時、彼が欲しいものとは違うおもちゃが渡されると、彼はそれを押しやって叩いた。私が考えるところでは、この叩く行動は怒りの本能的な (instinctive) サインであり、ちょうど卵から孵ったばかりのワニの子どもがあごを開け閉めするようなもので、彼がおもちゃを壊そうと考えたわけではないだろう。2歳3ヶ月のとき、彼は、彼の機嫌を損ねた人に対して本やら棒やらを投げつけることが上手になった。これは私の他の息子たちでも同様であった。一方、私の幼い娘たちの場合には、このような態度は一度も見られなかった。それで私は、ものを投げるという行

動の傾向は男児に受け継がれるのだろうと考えている。

恐怖について：この感情 (feeling) はおそらく子どもたちが経験するもっとも早期の感情である。それは、子どもたちが生後わずか数週間でも、突然に生じた音にびっくりして、泣き叫ぶことからわかる。ここで述べている子どもが生後4ヶ月半になる前に、私は彼のそばでさまざまな、新奇で大きな音を立ててみたことがあった。それらの音はみなおもしろいはずら (excellent jokes) として受け取られたが、この時期に、私は一度、それまで一度もやったことのない、大きく響くような音を立ててみた。彼は即座に真面目な顔つきになって (looked grave)、泣き始めた。二三日後に、私はそのことを失念してまた同じ音を立てたが、結果は全く同じであった。ほぼ同時期に (つまり137日目のことである) 私は彼に背中をみせて後ろ向きに近づいて、そして不動の姿勢で立った。彼はひどく真面目な顔つきになって、驚愕した。もしも私が振り返らなかったら、すぐに泣き叫んだ (cry) ことだろう。私が振り返ると、彼の顔は即座にゆるみ、微笑に変わった (relaxed into a smile)。よく知られているように、もっと年長の子どもの場合、暗闇や、大広間の薄暗い角を怖がるように、あいまいな、漠然とした恐怖を経験するものである。一つ例を挙げよう。私は、この子が2歳3ヶ月 (2 1/4 years old) のとき、ロンドン動物園につれていった。彼は、彼がすでに見知っている動物に似た動物、例えば鹿やアンテロープ (訳注：レイヨウ) など、そして鳥類はダチョウさえも喜んで見ていたが、檻の中にいる様々な大型のけものに対してはおびえていた。その後も、彼はしばしば、動物園にまた行きたいと言ったが、「おうちの中にいるけもの」は見たくないと言った。われわれには、なぜそれが怖いのか、どうしてもわからなかった。子どもたちが持つ、この、あいまいではあるが非常に現実的な恐怖は、経験とは無縁のものであるから、太古の未開の (savage) 時代における真の危険とくだらない迷信の効果を受け継いだものであると考えることはできないだろうか。このことは、かつてはしっかりと役立っ

ていた特性が今に伝えられて、発達の初期に現れるけれども、その後は消えてしまうという、われわれの知識とよく整合している。

快の感覚について：子どもたちは、乳を吸っているときには快を感じていると考えてよいであろう。これが正しいことは、乳を吸っているときに目が泳ぐ（swimming eyes）という表出行動によって示されている。この子の場合には生後45日で微笑したが、第2子は46日であった。これらは真の微笑であって、快を示すものである。なぜなら、彼らは目を輝かせ、まぶたはわずかに閉じられていたからである。微笑が生じるのは主として母親を見ているときであったから、おそらくは精神に起源がある（mental origin）だろう。この子どもは当時しばしば微笑し、その後もしばらくのあいだよく微笑したが、これはなんらかの内的な快の感情によって生じたものである。なぜなら、彼を刺激したり愉快がらせるようなことは何も起こっていなかったからである。生後110日のとき、この子の顔にエプロン（pinafore）をかぶせ、すぐに取り払うとひどく喜んだ。また、私が隠していた顔を突然見せて彼の顔に近づけたときも同様であった。このとき、彼は声立て笑い（laugh）の始まりである小さな音声（a little noise）を発した。この場合、喜び（amusement）の主たる原因は驚きであって、これはかなりの程度、成人における機知（wit）の場合と同様である。私が信じるところでは、突然に顔を見せると喜ぶようになる3～4週間前から、彼は、鼻やほほを軽くつまむと、それを楽しみからかい（a good joke）として受け止めていた。私は最初、ようやく生後3ヶ月を過ぎたばかりの小児がユーモアを楽しむということに驚いたのであるが、われわれは、仔犬や仔猫が非常に早期から遊びを始めることを思い出すべきであろう。生後4ヶ月のとき、この子がピアノ演奏を好んで聴いていたことは、彼の振る舞いから見て間違いない。つまり、ここには明らかに美的感情（aesthetic feeling）のもっとも早い兆候があらわれていた。ただし、もっと前から派手な色彩に惹きつけられていたから、これも美的感情と考えてよいかもしれない。

愛情について：彼が生後2ヶ月未満で、世話をしてくれる人びとに対して微笑していたことから判断すると、この感情はおそらく、発達のごく早期から出現したと言えるだろう。ただし、彼が4ヶ月近くになるまで、彼が人を区別して認識しているという明瞭な証拠は見られなかった。ほぼ5ヶ月近くなって、彼は乳母のところに行きたいという意志（wish）をはっきりと示した。しかし、1歳を過ぎたとき、彼は、しばらく家を離れていた彼の乳母に対してキスを数回したのであるが、それ以前には、観察可能な行為（overt act）によって愛情を自発的に表すということではなかった。同類の感情である同情については、生後6ヶ月と11日にはっきりと示された。彼の乳母が泣き真似をしたとき、彼の口角が引き下げられて憂うつな表情になったのである。嫉妬は、彼が15ヶ月半のときに、私が大きな人形を可愛がってみせたり、彼の妹を抱き上げたりした場合に、はっきりと表現された。イヌでは嫉妬感情が非常に強いことを考えると、適切な方法でテストを行えば、子どもたちは上述の時期よりもっと早くから嫉妬を表現することがわかるのではなからうか。

観念の連合、理性、その他について：私が観察した限りにおいて、一種の実際の理性作用（practical reasoning）があることを示す最初の行為は、すでに述べたように、彼が私の指に沿って手をおろして行き、指先に至るとそれを口に入れるという行為である。これは生後114日目のことであった。4ヶ月半のとき、彼は鏡に映る私や彼自身の姿に、繰り返し微笑みかけたから、それらの姿が本当の対象物であると彼が誤解していたことは間違いない。しかし彼は、背後から私の声が聞こえるとはっきりと驚くくらいの分別（sense）があった。多くの小児と同様に、彼は鏡に映る自分の姿を見ることを楽しんでいて、それから2ヶ月も経たないうちに、彼はそれが映像であることを完全に理解した。なぜかという、私が音を立てないようにして顔をしかめて見せると、かれはすぐに後ろを振り向いて私を見たからである。彼はしかし、生後7ヶ月のとき、戸外にいて、大きなガラス窓の内側にいる私を見て、それが映像である

か疑い、困惑しているようであった。私の、別の子どもの例であるが、これは女兒で先の子ほど敏感ではなく、ちょうど1歳のときに、後ろから近づいてくる人物の鏡像を見てひどく困惑していた。私は、数匹の高等な類人猿に小さな鏡を持たせてみたことがあるが、彼らの行動は全く異なっていた。彼らは手を鏡の背面にもっていき、それなりの分別を示したが、しかし自分自身を見て喜ぶことはなく、怒り、そしてそれきり鏡を見るのをやめてしまった。

生後5ヶ月のとき、まったく教えてなどいないのに、彼の心（mind）に観念の連合が現れて定着した。帽子とオーバーを着せられたあとで、すぐに戸外につれだされなかった場合には、ひどく不機嫌になった。ちょうど7ヶ月のとき、彼は乳母と彼女の名前とを連合させるという大きな進歩を成し遂げた。私が彼女の名前を呼ぶと、彼は彼女を捜してあたりを見回した。別の男児の例であるが、頭を左右に振って喜んでいた時期があった。われわれはそれを見て喜んで、「頭を振ってごらん」と言いながら頭をふる真似をした。彼が生後7ヶ月のとき、その言葉だけで、他にはなんの援助もなしに頭を振ることがあった。前出の男児に話を戻すが、その後の4ヶ月の間、この子どもはさまざまな物ごとや行為と言葉とを連合させた。キスしてと言われると、彼は唇を突き出してじっとしていた。また彼は、石炭箱だとか床にこぼれた水やらに対して頭を振り、「あー」と叱責するかのような声を出したが、彼はこれらが汚いものであると教えられていたのである。生後9ヶ月まであと数日という時点で、彼は自分の名前と鏡の中の映像とを連合させていたことを付け加えておこう。彼は自分の名前を呼ばれると、鏡がいささか遠くにある場合でも、鏡のほうに向き直った。9ヶ月を数日過ぎると、手、あるいは他の物体が彼の目の前の壁に影をつくるときには、それが彼の背側にあるということを誰にも教わらずに習得していた。また、1歳にならないうちに、短い文を、間をおいて二三度繰り返すだけで、なんらかの観念の連合（associated idea）を心のなかにしっかりと固定することができた。テューヌ氏の記事（pp.254-256）に述べられている子ども

の例では、早期の事例を見落としたということがなければ、諸観念が連合しはじめる年齢はずっとあとであるように見受けられる。教示によって観念を連合させたり、自発的に観念の連合を生じさせたりする能力（facility）の獲得は、子どもの心と、私が知っている限りでもっとも賢い成犬の心との間にある様々な違いの中で、もっとも強くはっきりとしたものであると、私には思われる。この子どものころと、メビウス教授（原脚注1）（訳注4）によって記述されているカワカマス（pike）の心とはいかにも対照的である。このカワカマスは丸3ヶ月の間、ミノー（minnow）（訳注：コイ科の小魚）との間を隔てているガラスの仕切り板に向かって繰り返し激突しては気絶した。そして攻撃すればかならず罰を受けるということをようやく学んだあとで、このカワカマスは先のミノーとおなじ水槽に入れられたのだが、今度は、頑固かつ無分別に、決してミノーを攻撃しようとはしなかったのである。

好奇心は、テーム氏が書いているように、子どもがかなり幼いときから現れる。好奇心は子どもの心の発達において非常に重要であるが、私はこの問題について特別な観察をしていない。模倣も同様に重要な要因として関わってくる。子どもが生後4ヶ月のとき、私は、彼が様々な音を模倣しようとしていると思っていた。しかしこれは私の思い違いだったかもしれない。なぜなら、彼が生後10ヶ月になるまで、私は彼が音を模倣したと確信することができなかったからである。11ヶ月半のとき、彼はどのような行為でも容易に模倣することができた。例えば、何か汚いものに対して頭を振りながら「アー」と言ったり、あるいは一方の手の人差し指を他方の手のひらの中央に注意深く、ゆっくりと持って行き、「Pat it and pat it and mark it with T」の童謡（訳注5）のふしにあわせたりした。このような行為をうまくしおせた後に彼が満足した（pleased）表情をするのをながめるのは、愉快的なことであった。

幼児の記憶力を示すものとして、よい事例であるとは言えないかもしれないが、この子は3歳と23日のときに、正確に6ヶ月の間祖父と会っていなかったの

だが、祖父の肖像の版画を見たとき、即座にそれが祖父であることを認め、そして祖父のもとを訪れたときのさまざまな出来事について話したが、それらは確かにこの期間中に一度も述べられることのなかったことがらであった。

道徳感情について (moral sense) (訳注 6) : 道徳感情の最初の兆候があったのは、彼がもうすぐ生後13ヶ月になるときであった。私は彼に、「ダディ (Daddy) (これは彼のニックネームである) 君はパパにはちっともキスをしてくれない、悪い子だね」と言った。この言葉は疑いもなく、彼を少々居心地わるくしたようであった。そして私が自分の椅子に戻ったとき、かれは唇を突き出して、いつでもキスをしますという仕草をした。次いで彼は怒ったようなしぐさで手を振りはじめ、私が近づいて彼のキスを受けるまでそれを続けた。数日間、ほぼ同様の光景が何度も繰り返された。この伸直りは彼に大きな満足を与えたようである。なぜならそのあと何度も、かれはまず怒ったふりをして私を叩き、それから私にキスをすると言ってきかなかったからである。これはちょっとした芝居じみた仕草 (a touch of the dramatic art) であるが、ほとんどの幼児において非常に顕著に見られることである。自分の感情を操作して、したいと思ったことを容易にすることができるようになるのが、およそこのくらいの年齢なのである。生後2歳3ヶ月のとき、彼はジンジャーブレッド (訳注: ショウガクッキー) の最後のひとかけらを妹にやってから、「親切なダディちゃん、親切なダディちゃん」と大声で自画自賛した。それから2ヶ月後に、彼は嘲笑に対して著しく敏感になり、笑い声を立てながら (laughing) 話をしている人物は自分のことを笑っているのかもしれないと疑うことがよくあった。それから少しして (2歳と7ヶ月半)、私は彼が食事室から出てくるのに出くわしたが、彼の目は尋常ならず輝いており、また妙に不自然な様子であった。誰かいるのだろうかと食事室に入ってみたところ、彼は粉砂糖をなめていたのだった。そして、このことはつねづね、彼がやってはいけないと言われていたことであった。彼はどのような形にせよ、罰をうけたという経験は全くなかったの

で、彼の奇妙なふるまいが（罰に対する：訳補）恐怖によるものでなかったことは確かである。私が考えるところでは、これは良心のとがめを伴った快の興奮であったと思う。2週間後に、私はまた、彼が食事室から出てくるところに出くわしたが、こんどは、彼は丹念に丸めた自分のエプロンをちらちらと見ていた。彼のふるまいがまたもや奇妙だったので、私は丸めたエプロンの中に入っているのかたしかめようとした。彼は、何にもないから「あっちへ行って」と繰り返したが、わたしはエプロンがピクルスの汁で汚れているのを見つけた。つまりこれは、慎重に計画された欺瞞であったのだ。この子は気だてのよい子になるようにと育てられた（educated solely by working on his good feelings）ので、じきに、誰もがうらやむほど正直でやさしく、心のひろい子に育った。

無意識とはにかみ（shyness）について：ごく幼い子どもが、みかけない顔を見ると、まばたきもせずに臆面もなくその顔を凝視するのには、誰もが驚かされる。年長者であれば、このようなまなざしは動物か無生物に対してしか向けられないものである。つまりこれは、幼児は、見知らぬ人物を怖がることはあるが、自分自身については全く考えておらず、従って全く恥ずかしがらないのだと思われる。私が初めて我が子のはにかみの兆しを見たのは、生後2歳3ヶ月に近い頃で、私が10日間家をあけたあとに私に対して向けられたものであった。彼の視線は私の目からわずかにそらされていたが、まもなく彼は私の膝の上に座ってキスをし、それではにかみの兆しはすべてなくなった。

コミュニケーションの手段について：涙を流さずに長時間続くこの不快な音（noise）は、泣き声（crying）というよりは金切り声（squalling）というほうが適切だろう。もちろん本能的に発せられるのであるが、なんらかの苦痛があることを示すのに役立っている。生後しばらくたつと、この音はその原因、例えば空腹や苦痛によって異なってくる。私がこのことに気がついたのはこの子が生後11週のときであるが、別の子どものときにはもう少し早かったと思う。

さらに彼は、まもなく意図的に泣くことを覚えたようで、状況にあわせて顔をしわくちんにし、何かが欲しいということを示した。生後46日で彼は初めて、自分の欲求を満足させるような意味を持たない、わずかな音声をいくつか (little noises) 発したが、これらの音声はやがて多様になった。最初の声たて笑い (laugh) は生後113日目に観察されたが、別の子どもではもっと早かった。この日のことであったと思うのだが、前に述べたように、彼はさまざまな音を模倣しようと試みはじめた。しかし確かに模倣したと言えるのは、もっと後になってからであった。生後5ヶ月半で、彼は「ダー」と明瞭に発音したが、それには何の意味も付随していなかった。1歳を少し過ぎたころ、彼は自分の意志 (wishes) を示すのに身ぶりをを用いた。彼は紙切れを拾い上げて私に寄こし、暖炉の火を指し示した。当時、彼は紙が燃えるのをよく見ていたし、また、それを見るのが好きであった。きっかり1歳になったとき、彼は食物を表す一単語を発明するという、偉大な進歩を示した。彼は「ママ (mum)」と言ったのである。しかしどうして彼がそう言うようになったのかということは、私にはわからなかった。それ以来、彼は空腹時には泣くかわりに、彼はこの単語を指示的に、あるいは「食べ物ちょうだい」という意味の動詞として、使用した。この単語はしたがって、テヌ氏の子どもがもう少しあとに、生後14ヶ月のときに発した「ハム (ham)」に対応するものである。しかし私の子どもの場合には、ママという単語を、多様な意味を表す実体的名詞 (substantive) としても使用していた。例えば彼は、砂糖を「シュー・ママ (shu-mum)」と呼んだし、また少し後になって「黒い」という単語を覚えたあとは、かれはリコリス菓子 (訳注：甘草などで味付けした菓子) のことを「ブラック・シュー・ママ」と呼んだ。つまり黒い砂糖の食物ということである。

ママという単語で食べ物をねだる場合、彼がこの単語に対して「非常にはつきりとした疑問をあらわす音調を音の最後に」(私が当時書き留めた記述である) 付け加えたという事実、私はとりわけ強い印象を受けた。彼はまた「アー

(Ah)」という音も発したが、これは当初、主として、誰か人物を認めた時か、あるいは鏡に映る自分自身を見たときに使われた。これは感嘆の音調であって、われわれが驚いたときに使用するような音調である。私のノートには、これらのイントネーションの使用は本能的に (instinctively) 生じたものように思えるを書いてある。この問題について、これ以上の観察がなされていなかったことは残念である。しかし私の記録によれば、もう少し後になってから、生後18ヶ月から21ヶ月の間に、彼は「したくない」ことを表現するために反抗的に鼻をならし、断固として拒否するふうに、自分の音声の調子を変えるようになった。また、「なるほどたしかにそうである (Yes, to be sure)」ことを示す同意の「フム (humph)」を使うようになった。テーヌ氏もまた、彼の娘が話すことをおぼえるよりも先に、音声の調子に高度な表現力を持たせたと強く主張している。私の子が食べ物をおねだるときに、ママという単語に疑問の調子を付加したことはとりわけ好奇心をそそる。なぜなら、もしも一語、あるいは短い文をこのように使用しようとするなら、語や文の終末において、音声の高さ (the musical pitch of his voice) をかなり高くしなければならないからである。私は他所で (訳注7)、明瞭に発音される言語 (articulate language) を使うようになる以前、テナガザル (Hylobates) のような類人猿がそうするように、ヒトは音階をつかって (in a true musical scale) 鳴き声を発しただろうと述べたが、子どもの発音において音の高さが変えられているという事実がこの見解と密接に関連していることには、当時気がつかなかった。

最後に、子どもの諸欲求は当初は本能的な叫喚 (cries) によって理解されるが、叫喚はコミュニケーションの手段として、次第に、一部は無意識的に、また一部は、私の考えるところでは意図的 (voluntarily) に、変容をうける。すなわち、まず顔つき (features) の無意識的表出によって、次いで身ぶり (gestures) と、異なったイントネーションではっきりと区別できる発声によってコミュニケーションが行われ、最後に、まず子ども自身によって発明される、

細かい区別のない (of a general nature) 諸単語によって、さらにその後、子どもが聞き取った言葉を模倣することによって、さらに精細な区別が可能なる (of a more precise nature) 諸単語によって、コミュニケーションが行われる。そしてこの後者の弁別性の高い諸単語は、驚くほどの速さで獲得される。子どもは、他者から自分に向けられる意味や感情 (feelings) を、それらの人びとの顔つきによる表出によって、かなりの程度、また私が思うにはかなり早期から、理解している。微笑に関しては、このことに疑いはほとんどない。私がここでその生育について述べた子どもの場合、生後5ヶ月を少し過ぎたころには、愛情の表現 (compassionate expression) を理解していたと考えられる。彼は生後6ヶ月と11日で、乳母の泣き真似に対してはっきりとした同情を示した。当時もうすぐ1歳になるときであったが、なにか新しいことを成し遂げて喜んでいるとき、彼は間違いなく自分の周囲の人びとの表出を注意深く観察 (study) していた。それはおそらく、ある顔つきが他の顔つきよりも快適な特徴をたくさんもっていたからではなく、表出の仕方が違うからであったが、これは生後6ヶ月を少し越えた頃というごく早期においても、そうであった。彼は1歳以前に、幾つかの単語と短い文章のほかに、イントネーション (語調) と身ぶりとを理解していた。彼はまず一単語を理解したが、それは彼の乳母の名前であり、彼がママという最初の単語を発明するちょうど5ヶ月前のことであった。しかしこれは驚くには値しないことかもしれない。なぜなら、もっと下等な動物でも、いくつかの話し言葉の理解は、容易に習得するからである。

チャールズ・ダーウィン

(訳文おわり)

原脚注1 Die Bewegungen der Thiere, &c., 1873, p. 11.

訳注1 テーヌ氏

イッポリット・テーヌ (Hippolyte Adolphe Taine, 1828～1893) フランスの歴史家、批評家、哲学者。心理学の分野ではなじみのない人物である。フランス語版の Wikipedia では、実証主義者として、自然科学（博物学）の方法を歴史や文芸批評に応用したことが述べられている。英語版の Wikipedia では、主として、彼が文芸批評に race, milieu, moment という3つの概念を適用したことが述べられている。日本語版 Wikipedia ではフランス革命に対して否定的な論陣を張った人物として評価されている（いずれも、2009年8月の検索による）。テーヌは1876年に発行された雑誌の創刊号（the Revue Philosophique No. 1. (January 1876)）に自分の子どもの言語発達の観察記録を載せ、これは、Mind誌の第2巻（1877）（通巻6号）に（おそらく編集者であったペインの手によって）英語訳として紹介された。ダーウィンの寄稿は7月刊の第7号である。

なお、このテーヌの記事を含む the Revue Philosophique (“Revue Philosophique de la France et de L’Étranger” Theodule Ribot の編集による）の創刊号について、ウィリアム・ジェームズが他誌に批評を書いている。短い批評の三分の一は子どもが言語を自発的に発明することに関する、テーヌの引用である。ジェームズによるテーヌの記事の引用部分の英語訳はMind誌に掲載された英語訳の相当部分とは異なっているから、これはジェームズ自身が英語に訳したのであろう。

訳注2 37年前の日記

この日記（記録）に出てくる子どもは、1839年12月27日生まれのダーウィンの第一子である。祖父の名をとって、ウィリアム・エラズマスと命名された。なおダーウィンがエマ・ウェッジウッド結婚したのは同年の1月29日。ダーウィンには早世したものも含め、6男4女、計10人の子があった。A.デズモ

ンドとJ.ムーアによる大著の伝記「ダーウィン」(渡辺政隆(訳) 工作社1999)によれば、「くしゃくしゃの顔で本能的な行動をとる赤ん坊は、ただちに、強迫観念に取り付かれたような観察の対象になった。溺愛状態の父親はベビーベッドをのぞき込み、顔の表情のゆがみ方を観察する格好の材料とした。鏡に対するウィリー・ダーウィンの反応は、オランウータンのジェニーに対応するものであり、怒り、恐れ、喜び、理性を示した最初のしぐさも記録された。(同訳書I, p.381)」

1841年3月2日に、第2子のアン・エリザベスが誕生。ダーウィンの「日記」は月日を追って書かれているわけではなく、ウィリアムの記録に「アンの場合は」のように追記がなされている。この「日記」(Notebook of observations on the Darwin children)は、1839-1856にわたってつけられている。以下のURLでテキスト化されているものが入手できる。

http://darwin-online.org.uk/EditorialIntroductions/vanWyhe_notebooks.html

訳注3 この問題について書いた私の著作

これは明らかに、“On the Expression of Emotions in Man and Animals”(1872)を指していると思われる。同書の訳書(「人及び動物の表情について」 浜中浜太郎(訳) 岩波文庫, 1931, 2007)の訳者による序文には「・・・ダーウィンがその進化論を徹底させんがために試みた論著にして人間精神の研究に関するものはこれのみではない。なおこれ以外に二著を数えることが出来る。その一つは雑誌『マインド』に発表した『幼児の生活記録』という論文と、今一つは『人及び動物の表情について』とである。前者はダーウィンが自分の新生児の生活について具体的に行った研究記録であって、後の多くの児童研究家にとって研究方法の模範となり、今なお参考文献として尊重せられる。後者はすなわちこの訳書の原著であって・・・(後略)(仮名遣い、旧漢字など表記を改め、一部を省略。なお、引用文中で「これ」というのは『人間の由来』を

示す)」と述べられている (p.4)。

訳注4 メビウス教授

カール・アウグスト・メビウス (Karl August Möbius, 1825～1908) ドイツの動物学者、生態学者。1868年から Kiel 大学教授。生物の多様な種の生存が相互依存的であることを力説 (2009年9月検索のドイツ語版 Wikipedia 記事による)。なお、ダーウィンの "The Descent of Man and Selection in Relation to Sex (1871)" の第3章、"Comparison of the mental powers of man and the lower animals" にもこの実験への言及がある。それによれば、このカワカマスはミノーと同じ水槽に入れられたあと、当初襲っていた小魚は食べようとしなかったが、あとから加えられた小魚は襲って食べたとのことであるから、比較学習心理学の知見として興味深い。

"A curious case has been given by Prof. Mobius (23. 'Die Bewegungen der Thiere,' etc., 1873, p.11.), of a pike, separated by a plate of glass from an adjoining aquarium stocked with fish, and who often dashed himself with such violence against the glass in trying to catch the other fishes, that he was sometimes completely stunned. The pike went on thus for three months, but at last learnt caution, and ceased to do so. The plate of glass was then removed, but the pike would not attack these particular fishes, though he would devour others which were afterwards introduced; so strongly was the idea of a violent shock associated in his feeble mind with the attempt on his former neighbours." (<http://darwin-online.org.uk/>に収録されている "The Descent of Man..." から引用)

訳注5 「Pat it and pat it and mark it with T」の童謡

このままの童謡は見つからなかったが、“Pat it, and prick it, And mark it with T,” という表現の童謡は、

<http://www.nurseryrhymesonline.com/food/>あるいは

<http://dic.academic.ru/dic.nsf/enwiki/245828>に見られた。

子どもが間違っていて歌っていたのか、ダーウィンの記憶違いか、あるいは当時はダーウィンが記憶している表現であったのか、定かではない。

訳注 6 道徳感情について

moral sense を道徳感情と訳したのは、アダム・スミスの「道徳感情論：the theory of moral sentiments」が訳者の念頭にあったからであるが、このダーウィンの記事では sense は「分別」というニュアンスで使用されているので、あるいは「道徳的判断」のように訳するほうがよかったかもしれない。

訳注 7 他所で

The Descent of Man and Selection in Relation to Sex の第19章 “Secondary sexual characters of man” にテナガザル (*hylobates agilis*) の音声が非常に音楽的であると述べられている。The expressions of emotions におけるテナガザルの記述は、音声とは無関係であった。なおこの点については、<http://darwin-online.org.uk/>にあるこれらの書籍のテキスト化ファイルによった。

(完)

(うつき・なりすけ 神戸大学大学院国際文化学研究科・教授

心理学・コミュニケーション学)